



都市景観「いにしへのソウル」の復元

The Restoration of Seoul's Landscape



富井 正憲 (神奈川大学工学部建築学科 助教 / 共同研究員) TOMII Masanori

近年韓国の首都ソウルは都市の歴史的な景観を復元する大きなプロジェクトが盛んに行われている。

1990年代からソウル600年の記念事業としてスタートした景福宮をはじめとする朝鮮王朝時代の王宮群の修理と復元が継続して行われてきている。

また一昨年(2005年6月)には都市の中央を西から東に流れる清溪川の復元が完成し、内外で大きな話題となった。わが国でも似た状況にある東京日本橋の高架道路の取壊しが取り沙汰されたことは記憶に新しい。1960年代に相当汚れていた川を暗渠にして道路を新設し、さらにその上に高架道路を建設して近代化を推し進めてきた市街中心地を、2000年代に入ってから、前ソウル市長が選挙の公約通りにこれらの道路を全て壊し、もとの川を復元して美しい水を流すようにした。昔あった橋の位置には現代的な橋が1つ1つ丁寧にデザインされ、川の両側には遊歩道が設けられ、昔同様の親水空間が再生されて、市民の憩いの場所となっている。

川ばかりでなく、全長18kmの長さで囲まれた城郭も可能な限り城壁や門を修復復元して昔の姿を忠実に取り戻すように計画検討中である。

また景福宮の東隣に位置する北村地域は早くから歴史的な都市住宅群の保存地域として指定されてきたが、昨今はその伝統的な雰囲気を生かしてギャラリー、飲食、宿泊の施設にリニューアルして若者や観光客に人気を博し、都市の活性化に一役担っている。

こうした都市景観の保存、再生、復元の動きの中でもっとも興味を惹くのが2009年末の完工をめざして現在進捗中の光化門の復元工事である。光化門は景福宮の正面門であり、王宮の門の中でも最も重要な門であるが、建設されてからこれまでに幾度かの歴史的被害を被っている。

最初が1592年の豊臣秀吉の文禄慶長の役による焼失である。その後1867年に再建されたが、植民地時代の1915年に光化門のすぐ後ろの王宮敷地内に総督府庁舎の計画建設が開始されたときに、その正面に位置する光

化門の存在が障害となり、門の取壊しが発表された。これに対して柳宗悦が1922年(大正11年)雑誌『改造』9月号に「失われんとする一朝鮮建築のために」の有名な一文を発表し、光化門の取壊しに断固反対した。その運動の甲斐あって、門は総督府完成後の1927年に景福宮の東に移築された。

こうして一旦は取壊しの難から免れた光化門であったが、再び朝鮮戦争の時に2階の木造楼閣部分が破壊され、一層目の石造部分のみが残った。その後1960年代に入ってから元あった場所に再び移転復元する話が持ち上がり、実際に1968年に再建なって、今日まで存続してきた。

さて、せっかく復元され、今日まできた光化門が今回またわざわざ取壊されて、再々度の修復復元工事が開始されたのは何故であろうか。その理由を詳しく調べてみると、オリジナルな門と1968年に復元した門とのあいだには重要な相違点があり、今回はその違いを修正して、創建時の門と同じものを復元することが大きな目的であった。具体的な違いのひとつは、現在の門の位置と向きがオリジナルと大きく異なっており、元に戻すためには現在の場所より南に14.5m、西に10.9m移動し、かつ向きを時計回りに5、6度戻すことである。門の位置と向きの違いが生じた原因は、総督府を建設するときに元々の宮殿の配置軸から振って計画したためである。その振った理由を当時の設計関係者は、光化門通り(現世宗路)のもとと「くの字」に曲がっていた道路形状を真っ直ぐに拡張修正したためと書いているが、研究者はその説明に納得しない。総督府を朝鮮神宮が設けられた南山に正対面する様にしたためとか、あるいは王宮のすであった配置軸から意識的に外して、朝鮮王朝の風水の気から免れる配慮をしたためとの興味ある見解を挙げている。

違いのもうひとつは、現在の光化門がコンクリート造であるために、これを本来の一層部分を石造に、2層部分を木造に戻すことである。遠目では気がつかなかったが実際に取壊しの現場に立ち会ってみると、細かな斗供や欄干までが精巧にコンクリートで製作され、かつ色彩が

施されており、その出来栄には感心した。そのときに、この1960年代に再建したコンクリートの光化門が日本の技術で建設されたことを教えられ、またまた驚いた。確かに、当時の日本では寺社の建設に火に強いコンクリート造の工法が広まっていた時期で、2度の戦火に見舞われた光化門も早速その技術を取り入れたのであろう。

この復元工事にあわせて、光化門の前には来年の8月までに光化門広場が出現する。現在16車線ある広い幅員を持つ世宗路を10車線に縮小し、中央に幅27m、長さ500mのグリーンベルトの広場を新設する計画が最近発表された。完成すると北は遠く北漢山を望み、南は南山のソウルタワーを眺めることとなる。この南北の景観軸をもつ公園は既に復元なった東西に走る清溪川と直行することになり、一層ダイナミックな都市景観が誕生することになる。

こうした動きは朝鮮王朝の建築だけではない。近代に入ってから建てられた建築にも積極的である。日本の統治時代の建築では旧朝鮮銀行（現貨幣金融博物館）京城駅（現鉄道博物館）西大門刑務所（現西大門刑務所歴史館）が古くから保存されてきたが、昨今では旧大法院のファサードを再利用したソウル市立美術館、旧明治座の外観をそっくり生かしての現明洞芸術劇場、漢江の中洲に浮かぶ旧下水処理場を改造しての仙遊島公園、それに最近ようやく決定したソウル新市庁舎においても旧京城府庁舎をそのまま横に残す保存案で建設に入った。植民地支配の象徴的な存在であった旧総督府庁舎が取壊された時期からさして時間が経っていないが、大変な違いである。因みに光化門移転の直接的原因となった旧総督府の建物は戦後中央庁、国立中央博物館として長い間使用され、保存賛否大議論の末に1995年8月に取壊された。現在、その尖塔部分は天安の独立記念館横の公園でみることができる。



1960年代に再建したコンクリート造の光化門と旧総督府庁舎（前 国立中央博物館）



光化門のない1930年代の景福宮と太平路一帯の鳥瞰写真

以上のような日本統治時代の負の遺産をも抱き込んでの記憶の継承としての大規模な復元計画が着々と進んでいる背景には、ソウルを歴史都市としてユネスコの世界文化遺産に登録したいという戦略が見え隠れする。これまでのソウルにおける世界遺産は、朝鮮王朝の歴代の国王と王妃を祭る宗廟と、奥に秘苑という美しい庭園をもつ昌徳宮のわずか2つだけであった。今後これに清溪川、宮殿群、城郭、城門、歴史的地域、歴史建造物等の保存、再生、復元が新たに加わり、歴史都市造成計画が大々的に展開すれば、北の山を背にし、南の川に面し、4つの山に囲まれた背山臨川4局の形象をもつ、世界にもまれな風水都市の「いにしへのソウル」の景観が、歴史都市として世界遺産に登録される日もそう遠くはないであろう。